

## 阿弥陀堂

〔北花山にあり。本尊阿弥陀仏は坐像四尺許。伝云、いにしへ東山阿弥陀ヶ峯阿弥陀堂の本尊といふ。一

説には重盛公灯笼堂本尊ともいふ〕

## 元慶寺

〔同所阿弥陀堂東北一町許にあり。初は天台宗、近年禅宗と改む。妙嚴和尚天明三年に本堂再建あり〕

本尊薬師仏 〔坐像七寸、僧正遍昭の作とぞ〕 脇士 〔阿弥陀仏、慈覚の作、毘沙門天、運慶の作〕 僧正遍昭像 〔自作坐

像、一尺五六寸〕 花山法皇像 〔御自作、共に脇壇に安置す〕 当寺は陽成帝の御願にして、貞観十一年に伽藍を草創し、

紀元を配して元慶寺といふ。〔いにしへの地は街道の北山際に寺の内と呼ぶ字の地あり。土人曰、今に至り礎石土中よ

り出るとなん〕 花山僧正 〔僧正遍昭をいふ、俗姓は侍郎良安世が男にして宗貞と号す、仁明帝の近臣にして寵遇日々に

昌なり。嘉祥三年三月帝崩じ給ふ、其哀慕にたへずして比叡山に登り髪をおろし、慈覚の室に入て台教にわたる。又勅

あつて総持院において三部の灌頂を座主円珍にうけ、元慶三年に僧正となる。仁和帝遍昭が芳徳を重して封百戸を賜ひ

元慶寺の座主となる。寛平二年正月十九日入寂す〕 〔已上元亨釈書〕

花山に法皇のみゆきありしとてかへらせ給なんとせし時

拾遺 までといはゞいとまかしこし花山にしばしとなかん鳥の音もかな 僧正遍昭

花山法皇 〔入皇六十五代の帝、諱は師貞、冷泉第一の皇子、寛和二年当寺に入て落飾し給ふ、入覚法皇又花山院とも

号す。同年七月播州書写山に行幸まします、寛弘五年二月八日崩じ給ふ、寿齡四十一歳

〔著聞集云、さても御門世をそむかせ給ふ事のおこりいと哀に悲しく、法住寺相国の女弘徽殿こうきでんの女御にょごとてさふらはせ給ひけるが、かぎりなく御こゝろざしふかゝりけるにをくれさせ給ひて御歎浅からず、世中心ぼそく覚しみだれけるに、粟田あはだの関白いまだ殿上人にて蔵人辨と申けるが、扇子に妻子珍宝及王位臨命終時不隨者といふ文を書てもたれけるを御覽ぜられけるよりこそいとゞ御心おこりにけれ。下略〕

### 遍昭墳

〔元慶寺げんけいじの南二町ばかり民家の西田間にあり、塚のめぐりに柿樹数株あり〕

其身さへすがたとゞめず秋の風

斑

竹

### 東山寺

〔元慶寺げんけいじの奥にあり、禪宗。本尊釈迦仏、坐像二尺五寸。開基大円宝鑑だいゑんほうかん国師。拾芥抄云、東山寺華山くわさんと号す〕

### 神無森

〔追分おひわけの南、半町許、街道の右にあり。此地諸羽明神もろはの御旅所なり〕

鶺鴒くゝいざか坂おひわけ〔追分の東、今平地にして坂なし、神無森かみなしもりの北なり〕

〔盛表記云、会坂あふさかや一村杉の木のもとより笈の清水絶々なり、鶺鴒くゝいざか神無かみなしの杜醍醐路もりだいごちにかゝりて木幡こはたの里を伝ひつゝ、〕

蟬丸塔

〔山科地蔵堂の後にあり、いにしへより土人の口称なり、実記詳ならず〕

新古

秋風になびく浅茅のすゑごとにおく白露の哀世中

蟬丸

同 世中はとてもかくてもおなじこと宮もわらやもはてしなれば 同

四宮河原

〔山科安祥寺村のひがし南をいふ、今河原なし、仁明帝第四宮の旧蹟なるゆへ此名あり〕

四のみこうせたまへるつとめて風ふくに

家集 今朝よりはかなしのみやの山風やまた逢坂もあらしと思へば 小町

夫木 明わたる四の宮河原霧はれて遠かた人の数ぞみへける 順徳院

諸葉山

〔四宮河原の北にあり、土人柳山とよぶ。麓に諸羽社あり、前編に見へたり〕

六帖 つるしとてもろ葉の山にかくるとも我山彦になりてこたへん 喜撰